

好評発売中

林原美術館所蔵

池田光政自筆日記

マイクロ版

21冊 2リール 頒価 ¥60,000 (ご購入の際には消費税が附加されます)

マイクロ仕様

- * 16ミリマイクロフィルム * ポジ極性
- * ダイレクト検索機能付 * シルバーハライド
- * オープンリール/カートリッジ

ご購入者への特典

- * マイクロフィルムのご利用に伴って生ずるフィルムの劣化、損傷、紛失については特別価格にてご提供申し上げます。
- * マイクロフィルムの設置・保管に関するご相談に応じます。



丸善株式会社 [学術情報ソリューション事業部 企画開発センター]

〒105-0022 東京都港区海岸 1-9-18 国際浜松町ビル 7F

TEL 03-6367-6078 FAX 03-6367-6184 <http://www.maruzen.co.jp/>

営業部・支店・営業所＝横浜・八王子・大宮・筑波／札幌・盛岡・仙台・名古屋・岐阜・金沢・京都・大阪・神戸・岡山・松山・広島・福岡・長崎・熊本・沖縄／ニュージャージー

藩政を担った名君の自筆日記

東京大学名誉教授 金井 圓

江戸中期の岡山藩士で儒家の湯浅常山はその著『兩夜の灯』で、備前の芳烈公池田光政、水戸の義公德川光圀、会津の神公保科正之を「天下の三賢侯」といって、その学徳兼備の善政ぶりを称賛した。また、寛政度の老中、楽翁松平定信はその著『伝心録』で、松平新太郎少将光政、紀伊大納言頼宣、阿部豊後守忠秋、板倉内膳正重矩を「寛永の四君子」と並称してその機智に富み度量の広い幕藩為政者ぶりを指摘した。

その新太郎少将池田光政は、慶長14年（1609）4月4日岡山に生れ、寛永9年（1632）7月岡山藩主となってから50年にわたり藩政確立期の備前315,200石の領主として君臨した名君であった。為政者としての自覚から熊沢蕃山に陽明学を学び、仁政の理念を藩政に体現し、承応の大洪水に対処して知行制を改め、土木開発から士庶の教育、寺社の統制その他万般に指導力を発揮し、天和2年（1682）5月22日、岡山城で74年の生涯を終えた。

『池田光政日記』は、岡山入封5年後の寛永14年（1637）10月8日より、致代3年前の寛文9年（1669）2月2日まで33年間のうち一部に欠落があるため、31年間に及ぶその自筆日記で、

藩政指導の実況はもとより、対幕関係、一門親戚諸家、他大名家との応接、参勤交代、年中行事、冠婚葬祭など多岐に亘った自筆記録として類書がない。とりわけ随時家老以下家臣に与えた教諭の文言が目される。例えば慶安2年3月6日には年寄たちに「わがやくハこれ其外ハ不知などと有事、若被存候ハバ大きな越度にて候、我不及所ハ人ニ尋可被申事」など、日常の話し言葉そのままに記録されているものの、文字遣いには難読の部分が多い。

光政の伝記中の白眉、永山卯三郎の『池田光政公伝』上・下（昭和7年刊）編集のさいにも、「故ありて」公にされず収録できなかった『池田光政日記』は池田家藩政記録が岡山大学に移ったときも池田家に留めおかれ、幸い岡山大学の藤井駿・水野恭一郎・谷口澄夫3教授の尽力による翻刻本が昭和42年に刊行され、その全容が明らかにされながら、丸善企画の池田家文庫マイクロフィルム化のさいも当然収録されなかった。しかしこのたび旧池田家倉庫で開館された林原美術館の御好意で同じ丸善によりマイクロ化が可能となったことは、常に原典研究を願う歴史研究者のためにいとも欣快に堪えない。

池田光政日記について

京都府立大学教授 藤井 学

昭和20年6月29日、岡山はアメリカ空軍B29の大空襲を受けた。夜空にB29の無気味な爆音がひびきわたり、大火災が市街を包んだ。岡山の中心部は一面の焼け野原となり、天守閣も焼け落ちた。城の堀ばたにあった巖めしい池田家屋敷一現在の林原美術館もいくつも建物がきれいさっぱりと焼けていた。だが、不思議なことに、この屋敷の門長屋と内堀の石垣の上に建てられていた重層白壁の巨大な蔵二棟だけは焼け残って、周辺の焼け跡を睥睨するかのように見えた。ともかく、一面の焼け跡では目立ちすぎるこの白壁の大きな蔵が、今度はグラマンの襲撃目標にならないようにと、壁を黒く塗りつぶしたのを、そのころ付近の焼け跡の整理にかり出されていた旧制中学生徒の私は見たものである。

だが、不思議にも焼け残ったこの巨大な池田家の蔵のなかに、いまは林原美術館の所蔵となっている旧池田家伝蔵の数々の美術品、また現岡山大学附属図書館所蔵の膨大な池田家文庫の藩政史料、それに池田家重代の古文書や池田光政自筆日記などがひっそりと空襲の業火のなかを生き残っていたのである。

それから数年を経たある夏、大学院の学生だった私は、岡山大学の教官だった父藤井駿と恩師の水野恭一郎先生につれられて、旧池田邸事務所の一隅ではじめて池田光政日記を手にとった。水野先生が一枚ずつ丁寧に紙の皺をのばされ、私は懸命にシャッターを切った。小学生のころから「芳烈公」の名前で畏敬させられてきた光政の日記としては、あまりに

ありふれた粗末ともいえる紙に、丁寧かつ克明に書き込まれている筆跡を見ながら、これが「備前風」と世に評された、質素を旨とする備前池田藩風の原点なのかと、一人で合点したことを覚えている。

このたび、林原美術館収蔵のこの池田光政の自筆日記がマイクロ版として世に出される。現存の日記は21冊、光政が岡山に移封されて5年後の寛永14年（1637）10月8日から寛文9年（1669）2月2日まで約33年間の記事を含む日記である。わが国は江戸時代二百数十年間にわたって、世界史の上でも例をみない平和な時代を送った。この泰平の世は、なんといっても民政や生産力の向上、それに治安警察や軍事面も含んでの優れた行政組織の存在に、その鍵があったこと否めないところである。光政の日記は、近世社会が生み出した最高の行政統括者の日記である。幕府や一門や他藩との交渉、新田開発と土木事業を中心とする藩農政の振興、「備道興隆天下泰平」を標榜した仁政理念の体現、啓蒙的君主としての独自の政治行政への見識、家臣団の統制努力、さらにかれ自身の多彩な勉学、たとえば歌書や和書や儒書や仏典に至るまでの光政自身の筆写や研究にまで、日記の内容は実に多彩である。日記の冊子の形態や紙質は粗末なものだが、筆跡は達筆で記事の内容は気迫と気品に満ちている。まさに近世社会が到達した政治・行政・民政・農政・教育・文化などの実態を引き出してくれる宝庫である。全国の図書館や研究者が広く活用されることを期待する次第である。